

商業科目「プログラミング」において 主体的に学習に取り組むことのできる生徒の育成 ——ヒントノートの活用と、協働的な学習を通して——

特別研修員 商業 小関 香奈子 (高等学校教諭)

生徒の実態

分からないことがあっても既習事項を振り返ることができない。
分からない部分について教師や友人に聞くことができない。



手立て1 ヒントノートの活用

主体的に学習をするために、解決の手立てとなるヒントノートを活用し、自己調整を図りながら学習をする。

分からない所は
ヒントノートを見
て解決!



発展学習において分からない部分を、生徒自身で主体的に学習できるよう、既習事項の学習ノートを蓄積したデータファイル『ヒントノート』を活用して過去に学んだことを見直し生徒自身で課題を解決していく。

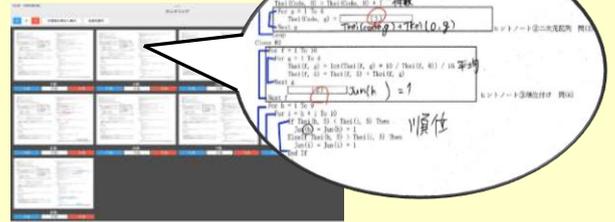


手立て2 協働的な学習

学習支援アプリケーションを利用して、グループにおいて個人で解答したものを共有し、協働して課題を解決する。最後まで粘り強く取り組み、解決を図る。



協働的な学習を通して、ICTを活用し、他の生徒と解答したものを共有、学び合いながら課題を解決していく。



MetaMoji Classroomでの協働活動のモニタリング

メンバーに聞いて、教えてもらおう!

目指す生徒像

主体的に学習に取り組むことのできる生徒



【成果】

- 手立て1については、個人学習の際に分からないことがあれば、ヒントノートや教科書、ワークを活用し、自らの理解度に応じた学習方法を活用する生徒の姿が見られた。振り返りシートにおいては、ヒントノートまたは過去に学習したのを見たという回答が多く、自らの学習を調整しようとする側面が見られた。
- 手立て2については、協働学習においてグループで話し合う姿が見られた。制限時間の中で最後まであきらめずに話し合い、自身で考えても分からなかった部分について、メンバーに聞き相談するなどして、粘り強く取り組む姿が見られた。

【課題】

- 課題の難易度の設定について、簡単すぎるとヒントノートを活用することなく解答でき、難しくても、ヒントノートの活用や協働学習においても解答できないといったことになってしまうことから、生徒に最も適した課題を提示することが重要である。
- 学んだことをメモし学習内容をデータとして蓄積していかなければ、ヒントノートとしての意味を要しないことから、常に学習したことをデータとして蓄積する習慣が必要となる。

